

# まち ひが 土が育む緑の輪

福原地区と高階地区に残る広大な平地林。循環型農業を支える基盤として大切にされてきた平地林は、かつて荒廃の危機に直面したことも。地元で「ヤマ」と呼ばれる平地林の再生を目指し、三十六人のボランティアグループ「川越緑のサポーター」と循環型農業を営む農家が、さまざまな活動に取り組んでいます。



伐採作業の様子。枝は自然に分解させるほか、しいたけを育てるほど木としても活用

## 芽を育てる

平地林を手入れし、守っていくことを継続的にできないものかと平成14年に十七人でグループが発足しました。前年の大東公民館の講座で、平地林の成り立ち、農業とのかかわりなどを学んだことが、活動のきっかけと代表の金子晃さん（霞ヶ関東五丁目・72歳・写真左下）。

活動当初、グループの皆さんを驚かせたのが、廃棄物の山でした。空き缶



やオートバイなどが「こんな奥まで」と驚くような場所に捨てられていたとか。落ち葉掃きや下草刈りのほか、ゴミ拾いも重要な活動のひとつになりました。



無駄に芽を刈らないように、下草刈りは手作業

次に取り組んだのは、苗木の植樹。平地林の中で、どんぐりから自然に出た芽の成長が一年間ほど止まることに気づきました。その原因は土ではないか。そう考え、落ち葉からたい肥を作り、農家の畑やジョイフルの敷地の一部を活用して、苗木を育てました。試行錯誤を繰り返して、植樹できるまで三年間。今では、四百本近くのコナラを育てています。平地林を学ぶ講座を開くと、苗木の植樹に熱心に取り組む受講者が多いことに驚き、うれしかったそうです。中には、自宅の庭で、苗が三メートル近くになり、どうしたらよいかと相談した小学生もいたとか。また、講座参加者のほかに福原中学校や高階西中学校の生徒が、社会

## 土の恵み

体験授業として落ち葉掃きや、たい肥作りに協力。「一人ひとりが持つ、自然を大切に作るやさしさや好奇心といった芽が育つてくれるとうれしいですね」と金子さんは、目を細めて話してくれました。まきなどに利用するため木を伐採し、切り株から伸びた新しい芽を育て、十五年から二十年後に再び伐採を繰り返す。この「萌芽更新」により平地林を再生するため、たくさんの人たちの協力で、今日も芽が育っています。

「作物は人や技術が作るものではなく、土が作るもの」と話して



身の丈ほどに育ったサトイモ

くれたのは、福原地区で農業を営む大木清志さん（下松原・59歳・写真右）。もともとこの地区の土は、赤土層で栄養分が少ない上に、水はけが悪かったそうです。そこにクヌギやコナラを植え、落ち葉

## 将棋で全国優勝



駒を指す本格的な手つき

倉敷市で8月7日に行われた将棋の全国小学生倉敷王将戦。埼玉県代表として参加した小林伸彰くん(武蔵野小学

校3年)が、参加64人の低学年の部で優勝しました。5歳から将棋を習い始め、今では毎日1時間は将棋盤に向かって、対局の研究をする熱心さ。2度目の挑戦となった同王将戦は、普段の練習が自信となり、負ける気がしなかったそうです。それでも、強かった決勝戦の相手に勝った瞬間は「うれしかった」。将棋の好きなところは? との問いに「逆転して勝つところ。将来の夢はプロ。好きな棋士は、羽生善治さん」と、にっこり笑って答えてくれました。

## ひまわりとふおとニュース

### こわい話でちよつぴり涼しく!?

夏休み、怖い話の読み聞かせなどが、各図書館で行われました。

8月19日の西図書館での「こわいこわいおはなし会」に集まったのは、30人ほどの親子連れ。大きな布の芝居では、話が進むにつれ、最初は面白がっていた表情が、



だんだん心配そうな面持ちに。祖父と来た本橋結芽さん(霞ヶ関北小学校1年)

は「面白かった」、妹の歩優さん(4歳)は「ちよつぴり怖かった」と話してくれました。

暑かった今年の夏。少し涼しくなったかな?

## 珍客来訪!?

平地林を持つ農家の収穫を手伝うのも、川越緑のサポーターの活動の1つ。7月中旬、ジャガイモ収穫中、卵を温めるカルガモを発見しました。驚かさないう、周囲の収穫は断念。また、近くに水辺がないことを心配したメンバーは、池を手作り。結局、ヒナの確認までは至りませんでした。農家と協力してカルガモを全力でサポートしました。



畑で卵を温めていたのは、自然の豊かさを表している一方で、それまでの場所が、何らかの原因で使えなくなってしまったのかもしれない。卵を温めている鳥を見かけたら、離れた所から優しく見守ってあげてください。

(助)埼玉県生態系保護協会川越支部  
みなほらひいいち  
笠原啓一さん(元町1丁目)



ダイコンの収穫体験にも協力しています

から作つたたい肥を土に混ぜる。そうした積み重ねを三百年以上続けられてきたおかげで、今の肥よくな畑になったと説明してくれまし

た。また、落ち葉をたい肥として使うと土が柔らかくなり、中に酸素が入ることで野菜の成長を助け、味に一層甘みが増える、と教えてくれました。「循環型農業ならではの味ですね」と大木さん。川越緑のサポーターから、平地林に植樹するための苗木を育てたい、と申し出があったとき、大木さんは自ら所有する畑の一部や水を提供。平地林を守るための取り組みを、積極的に応援しました。落ち葉掃き体験や収穫体験の場を提供することも平地林を

守ることにつながっています。「実際にヤマ(平地林)に入り、農作業を体験し、ここで採れた野菜を味わってもらおう。長年かけて作り上げた土の恵みを実感してもらえればうれしいですね」と大木さんは、笑顔で話してくれました。



「落ち葉がたい肥化する時の熱で温かいんですよ」と話す大木さん